

CA1798

## 本と出合える空間を目ざして —恵文社一乗寺店の棚づくり—

ほりべあつし  
堀部篤史\*

「本ていうのは生活の糧であり、生き物ですからね、魂を持つてる。」<sup>(1)</sup>

京都、寺町二条の名店三月書房の店主であり、尊敬する書店人のひとり、宍戸恭一さんの言葉だ。このフレーズには続きがある。本は魂を持っており、1冊だけポツンとあっても生き生きとしない。いわゆる大型書店のような判型や著者名順など、機械的なインデックスで並べると死んでしまう、と宍戸さんは語る。この言葉を同人誌『sumus』の創刊号で目にしたときは、私はすでに書店員として恵文社一乗寺店に勤めていたが、それよりもずっと以前から三月書房の棚づくりに影響を受けていた。

中高生の頃、祖父母が経営する蕎麦屋に顔を出して小遣いをもらうと、そのまま三条寺町通りを上がり三月書房へと足繁く通った。当時は青林堂から出版されているような、マイナーコミックに夢中だったので、大型書店よりもその手のコミックが充実している三月

書房を選んだ。10坪程の店内にびっしりと並べられた本の中の、ごくごく一部にしか興味も知識もなかったが、他とは違うコミックの並べ方から、ここに置いてある本は特別なのだ、ということは薄々理解ができた。コミック以外に当時の自分の知識レベルで手に取れるものといえば児童書くらいのもの。番台隣の足元に並べられた児童雑誌『たくさんのふしぎ』の中に、気になる号があったので、2冊ほど買って帰ったことがある。ずっと後になってからわかったことだが、1冊は、自分が夢中になっていた漫画雑誌『ガロ』にも頻繁に登場した沼田元氣というアーティストが「盆栽小僧」に扮して表紙を飾っていた。もう1冊には村上春樹の表紙を描いていた佐々木マキ（彼も自分が読むずっと以前の『ガロ』の常連作家だった）がイラストを描き、思想家の鶴見俊輔が文章を添えていた。手に取ったときには気がつかなかったつながりを、後になって発見した時のあの喜びは忘れられない。拾い集めたガラクタの破片がぴったりとあわさり、そこに宝の地図が浮かび上がるような発見。思えば、三月書房での体験は、「買い物」ではなく「学習」だったのだ。

あれから20年経った今も、仕事に行き詰まった際には三月書房を訪れ、本棚を見渡して初心に返る。今ようやくその棚に並ぶ本が少しずつ理解できるように



恵文社一乗寺店

\* 恵文社一乗寺店

なった。必要な商品を選びに通ったのではなく、その空間と共に通う自分が成長していったため、本棚の景色は時間と共に変化していくのだ。自分の知性や興味の設計図に、足りない部品を与えてくれるのではなく、設計図そのものを書き換えてくれるような本屋が三月書房だ。

反対に、オンライン上での情報検索や、インデックス順に並べられた大型書店、資料館や図書館で、あらかじめ決まったタイトルの必要な資料を探し求めることは、知性の設計図に欠けているパーツを取り寄せる、消費に似た行為だ。検索し、本を探す時、われわれの眼は必要としている本以外にとまることはない。まして、必要な情報が明確であればあるほど、それは書籍の形をしている必要すらなく、オンライン上の情報検索であらゆることが概ねフォローできる時代である。パスタと相性の良いオリーブオイルの種類、隣町の映画館の上映スケジュール、昨日読み終えた小説を書いた作家の生年やプロフィール。必要なものが何か明確に理解していれば、検索ボックスにそれらの単語を打ち込むだけで情報は入手できる。

それでは、書籍の存在意義とは何か。実用や即効性のある純粋な情報ではなく、著者の主観や編集、ブックデザインという幾人もの手が増えられたものが書籍である。その著者ならではの、提案があり、かつ著者の美意識によってコーディネートされた美しい写真が掲載され、それにみあったレイアウトが施されたもの。オリーブオイルの種類を調べるつもりだったのが、著者ならではの世界観や調理方法に驚いたり、反対に料理には関心がなかったのに、美しいブックデザインで手に取ったのをきっかけにイタリア料理の世界に入っていけるような、モノとして魅力的な本。それらはウェブ上のテキスト情報とは一線を画している。だから恵文社一乗寺店では、いわゆる実用書を避け、ブックデザインや編集にこだわった書籍を基準にセレクトする。

では、セレクトした本をどのように並べるのか。在庫量の多さや、アクセスの便利さを求めるのであればオンライン上の大型書店や検索システムにかなうものはないだろう。恵文社一乗寺店のような中型書店のやるべきことは、検索とは正反対の予期せぬ出会いを提供することだ。お客様が必要な情報をスムーズに提供するのではなく、かつて私が三月書房で経験したように、時間をかけて「知らないことすら知らなかった」世界に触れるきっかけを作ること。

例を挙げてみると、当店では文庫やハードカバー、シリーズなど出版社側が設定した判型やジャンルで本

を並べない。ほとんどの棚がテーマ毎に分けられており、そこには文庫があり、ハードカバーがあり、絵本も写真集も並べられている。例えば「食」をテーマにした本棚には、料理書はもちろん、池波正太郎による食にまつわる随筆、久住昌之が原作を手がける『孤独のグルメ』のようなグルメ漫画、月刊『たくさんのふしぎ』の和菓子特集号など、子ども向けのタイトルも並列に鎮座する。そのようにして並べられた本は、「絵本」や「文庫」という便宜上の分類を超え、内容によってあらたな文脈を獲得するのだ。パスタのレシピを捜しにこられたお客様が、イタリア料理の文化史や、スパゲッティの食べかたについて綴った随筆に出会うための仕掛けである。

もう一つ別の例を挙げよう。ショートショートの名手として、数多くの短編を書き、SFの設定とニヒルな世界観を持った作品で知られる星新一という作家がいる。彼の作品の多くは新潮文庫のラインナップになっており、2013年現在、それらの背表紙はすべて黄緑色をしている。大型書店のように、新潮文庫の「ほ」の著者の棚に、できるかぎりすべての星新一作品を丁寧に並べるのであれば、おそらく文庫が収まる棚一本ちかくが黄緑色に染まることになる。読者はそのような背表紙をみただけで、作品の違いを理解し、この1冊を読んでみたいという衝動を持つことができるだろうか。おそらく、特定の作品をなんらかのきっかけで読む必要が生じたお客様にはとても便利なのかもしれないが、星新一がどういう作家なのか知らない読者には手にとるきっかけすら生まれまいだろう。ショートショートやSFというパブリックイメージが定着している著者だが、中でも異色の児童向けファンタジー『ブランコのむこうで』という作品を新潮文庫のラインナップに残している。恵文社一乗寺店ではこの作品をあえて、女性向けのロマンティックな小説や、ファンタジックな画集と並べて、表紙が見えるように設置する。すると『ブランコのむこうで』が持つ「新潮文庫の『ほ』の作者」や「ショートショート」という文脈とは切りはなされ、前後左右の本からこれが星新一の作品でもここにならぶような異色の作品であり、まわりの作品が好きならば手に取ってみたいものとしてあらたな文脈を獲得することになるのだ。こうして当店では『ブランコのむこうで』がロングセラーとなった。

このようにして、お客様に思わぬ出会いを提供することこそが、大型書店やサーチエンジンにはない、街の書店が担うべき仕事ではないだろうか。書店も図書館も同様、これからは本にアクセスしやすい場所ではなく、思わぬ出会いを提供する場としてその存在意義が問われるだろう。魂を持たない「情報」としてでは

なく、魂を持った存在として本をどのように扱うか。足を運んでくれたお客様を知の森へと誘い込むため、発見を誘発する「棚づくり」こそが課題となってくるだろう。

- (1) 宍戸恭一ほか. 特集, 三月書房: 本は魂を持っている. Sumus. 1999, (1), p. 16-13. <http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ohgai/5180/sumus-ex.htm> (参照 2013-7-31)

[受理: 2013-08-08]

Horibe Atsushi.

The Creation of the Space Where People Meet Books: The Way to Arrange Book Displays at Keibunsha-Ichijoji.

CA1799

## 岡山大学における博士学位論文のインターネット公開義務化について

やまだともみ  
山田智美\*

### はじめに

2013年4月1日付けの学位規則改正により、博士学位論文の公表が従来の印刷公表に代えて、インターネット利用による公表とすることになった。このインターネット利用による公表とは大学等の協力を得て行うもの、とされており、機関リポジトリによる公表を前提としている<sup>(1)</sup>(E1418参照)。機関リポジトリ(以下、リポジトリ)とは、大学等の研究機関が自機関の研究・教育成果を電子的に保存し、インターネットを通じて無償公開するものである。

岡山大学ではこれに先駆け、2011年度から博士学位論文のインターネット公開を大学として義務化した。この義務化の経緯について報告する。

### 1. リポジトリにおける研究成果の公開義務化の前例

リポジトリにおける研究成果の公開義務化は海外では、米国のハーバード大学で一部の学部が所属研究者にリポジトリへの論文提供を義務付けた例や、米国立衛生研究所(NIH)が研究助成に関わる論文をPubMed Centralで公開をすることを義務付けた例などがある<sup>(2)</sup>。また、国内では北海道大学が研究成果をリポジトリで公開することを学内全ての研究者に強く「推奨」するとした例<sup>(3)</sup>や、名古屋工業大学が所属教員の公表論文を原則リポジトリ公開するとした例が

ある<sup>(4)</sup>。

### 2. 岡山大学での博士学位論文の公開義務化への動き

岡山大学のリポジトリは2006年4月公開から、学内発行誌を中心にコンテンツを増やしてきた。

一方、図書館では学内発行誌以外の資料も収集したい、という希望もあり、2011年度に学術雑誌のリポジトリ登録義務化を当時の館長に要望したところ、共感した館長が積極的に大学の執行部に働きかけて博士学位論文と学内プロジェクト研究成果論文のリポジトリ登録義務化について賛同が得られた。その後、2011年11月に学内の役員政策会議で決定、12月学内内部局連絡会で報告、という形で学内合意の形成ができた。

義務化の対象が博士学位論文、学内プロジェクト研究成果論文となったのは、博士学位論文は本来公表を前提としたものであること、学内プロジェクトは大学経費を使っているため説明責任があるため義務化できるのではないか、という執行部の判断からである。

### 3. 博士学位論文の公開義務化運用について

博士学位論文公開義務化の実際の運用にあたって、博士学位授与予定者全員にリポジトリ登録許諾確認書(以下、許諾書)の提出を求めるとした。義務化についての説明書の配付、許諾書と博士学位論文全文データの取りまとめは各研究科教務担当へ依頼した。

許諾書には「許諾しない」という選択肢も残し、許諾しない場合は理由を明記してもらうこととした。義務化としながらも「許諾しない」という選択肢を残した理由は、著者と教員に受け入れやすい形でスタートしたい、と考えたためである。

なお学位規則改正後は許諾確認欄を無くし、代わりに公表についての条件と、1年以内に公表できないとする場合は理由についての記入を求めるとしている。

博士学位論文公開義務化の決定が2011年11月であったので、2011年度については周知のみ行い、任意で許諾書を提出してもらった。2012年3月授与分について、学位授与者数150名のうち許諾書の提出があったのは38名、うち許諾が得られて登録できたのは32件であった。

### 4. 2012年度の実施結果

2012年9月授与分から義務化実施の対象とした。

実際の運用は前述のように、各研究科教務担当に許諾書と全文データの取りまとめを依頼したが、研究科によって事情が異なるため、取りまとめ方法は各研究科教務担当に一任した。

学位申請時に他の必要書類と一緒に提出を求める研

\*岡山大学附属図書館